

『往生論註』における問題点(3)

青 山 法 城

序

過去に二度、印度学仏教学会において『無量寿経優婆提舎願生偈註』(以下『論註』と略する)における非仏教的表現を「北魏的表現」と名付けて考察を試みてきたのであるが、今回は非仏教的内容を老荘思想と限定をして、『論註』巻上において老荘思想にみられる表現との関連性について考察を試みることにする。

まず『論註』巻上と『老子』及び『荘子』との共通の表現の認められる箇所を指摘しておきたい。

- (1) 清淨功德積の「倚伏相乗じ」⁽¹⁾
- (2) 性功德積の「長く大夢に寝て出でむ」⁽²⁾
- (3) 触功德積の「つひに楚越の労を去らしめむ」⁽³⁾
- (4) 身業功德積の「蟪蛄のごとくする」⁽⁴⁾
- (5) 心業功德積の「虚しく往きて実ちて帰り」⁽⁵⁾
- (6) 上首功德積の「強梁の者あり」⁽⁶⁾

(7) 八番問答十念積義の「蟪蛄は春秋を識らず」⁽⁷⁾の七カ所である。

この七カ所の中(2)(5)については一昨年の印度学仏教学会において考察を試みたのであるが、⁽⁹⁾以前の論考においてはそれぞれの箇所を個別に取り出して考察を進めたために、全体的な論考には程遠い状態であった。

そこで、今論考においては考察の視点の設定を以前のように個々に関して考察を加え結論を導くのではなく、総合的に全体を通して考察を進めることにする。

一

前記の七カ所について、比喻表現であるかないかをみておく必要があると思われる。その結果としては(3)(4)(6)(7)は『論註』においてはあくまでも比喻表現として使われているといってもよいであろう。「楚越の労」「蟪蛄」「強梁の者」「蟪蛄」などの言葉は、直接的に具体的に表現され

ているものを指し示すものではなく、これらの用語をもって間接的に補足的に曇鸞大師自身の積義を顕そうとしたものと受け取られる。そこで、前記の七カ所に関連する『老子』『莊子』についてみることにする。

(3) と関連する『莊子』においては

その異なるものよりこれを視れば、肝胆も楚越なり。その同じきものよりこれを視れば、万物みな一なり。⁽¹⁰⁾

と、「楚越」なる用語は比喩として使用されており、「楚越」そのものの意味内容とは直接的関係を見ることができない。

(4) に関連する『莊子』においても

かれ嬰兒たらんとせば、またこれと嬰兒たれ。かれ無町畦たらんとせば、またこれと無町畦たれ。かれ無崖たらんとせば、またこれと無崖たれ。これを達して無に入れよ。なんじはかの蟪蛄を知らざるか。その臂を怒らして、もつて車轍に当たる。その任に勝えざるを知らざるなり。⁽¹¹⁾

と、「蟪蛄」の用語は比喩的表現であり、「蟪蛄」の意味内容そのものでもって考えを主張するものではない。

(6) に関連する『老子』においても

故に物あるいはこれを損して益し、あるいはこれを益して損す。人の教うるところはわれもまたこれを教う。「強梁なる者はその死を得ず」と。われもつて教の父となさんとす。⁽¹²⁾

と、「強梁の者」そのものは老子思想を直接的に表現するも

のではなく、間接的比喩的なものである。

(7) に関連する『莊子』においても

この二虫また何を知ららん。小知は大知に及ばず。小年は大年に及ばず。なにをもつてその然るを知るや。朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず。これ小年なり。楚の南に冥靈なるものあり、五百歳をもつて春とし、五百歳をもつて秋とす。⁽¹³⁾

と、「蟪蛄」の用語は莊子思想を理解させるための比喩の一つとして出されるのであって、「蟪蛄」そのものとは直接的関連をみることはできない。

以上のことより(3)(4)(6)(7)については『論註』においても『老子』『莊子』においても比喩としてこれらの用語を使用しており、思想的に両者の間に関連を直接みることとはできないであろう。但し、『論註』が『老子』『莊子』よりの時代の代りに成立していることより『老子』『莊子』における比喩的表現を曇鸞大師が参考にしていたとみること十分可能であろう。しかし、これをもって思想的影響をいふことはできないであろう。

二

次に(1)(2)(5)の三カ所についてであるが、この中で(2)(5)に関しては一昨年の印度学仏教学会において論考を試みたので、今は簡潔に結論だけを述べることにす

る。文脈的な意味よりすれば、同一内容とは言い難く、換骨奪胎的に曇鸞大師が『莊子』の用語を便宜上使用されたといえるであろうというのが一応の結論であった。特に(5)に関しては文脈上非常に理解し難いものであった。⁽¹⁴⁾

そこで(1)(2)(5)をみることにするが、この三つに關しては、それぞれの功德の相を述べ、釈義をほどこすという重要な処で『莊子』の用語を使用されている。

具体的には(1)については「三界」の語の釈義をほどこす最後に出されている。これに対して老子では

その政悶悶たれば、その民淳淳たり。その政察察たれば、その民欠欠たり、禍は福の倚る所、福は禍の伏する所。だれかその極を知らん。⁽¹⁵⁾

とある。

(2)については「三界」の具体的相を示すために出されている。これに対して『莊子』では

夢の中にまたその夢を占ひ、覺めて後にその夢なりしを知るなり。かつ大覺ありて而る後にこれその大夢なることを知るなり。⁽¹⁶⁾

とある。

(5)については如来の平等を示す締めくくりとして出されている。これに対して『莊子』では

王駘は兀者なり。これに従いて遊ぶ者、夫子と魯を中分す。立ちて教えず、虚して議せず、虚にして往き、実にして帰る。もとよ

り不言の教あり、形なくして心成れる者か。是れ何人ぞや。⁽¹⁷⁾

(1)(2)については意味内容的には『論註』と『莊子』の間に大きな隔たりがあるとは考えにくい。細部に至って考察すればそれぞれに特徴があり、小さな相違が目立ってくるが、今は小さな相違を問題とするのではないために考察を控えることにする。

しかし、(5)については意味内容的に大きな隔たりがあり、曇鸞大師の意図される所を計り難いのである。

以上のことより『莊子』の用語の使用には二種類の傾向があると考えられる。(1)(2)のように「三界」つまり如来のおこしたまえる誓願に基づく浄土以外の世界を顕すために『莊子』にみられる用語をある程度そのままで使用されるという傾向と(5)のように『莊子』にみられる用語を内容的に転化されて如来の徳をしめそうとする傾向である。このように分類することが可能であるならば、(1)(2)については大きな問題にはならないであろう。仏教と老荘思想の何れをもってより高度な思想ということは不可能であろうが、曇鸞大師にとつてはあくまでも仏教本意であり、老荘思想は世俗における教えであると位置付けられていたといえるであろう。そのため老荘思想をもって仏の世界つまり浄土以外の世界を説明されようとしていたとみられるからである。し

かし、問題は(5)である。これは前出の(1)(2)とは傾向が異なり、意図されている所が計り難い。思想的影響と断言することも不可能である上に、この「虚しく往きて実ちて帰りの用語の解釈すらままならない。⁽¹⁸⁾これを如何に解釈、理解するが今後の我々の課題であると考えられる。

結

以上、『論註』巻上において老荘思想にみられる表現との関連性について考察を試みたのであるが、これらの表現について三種類の分類が成り立つといえるであろう。一は比喩的表現、二は「三界」といわれる世界を表現するための用語引用、三は本来の意味内容より転化し、独特の表現としての使用である。一、二については十分に考えられることであり、これらの表現は仏教を基本的立場としていたとしても許容範囲内に十分治まると考える。しかし、三に関しては今後ともさらなる研究を必要とし、これについての理解は我々に新たな思考を提起すると考える。

- 1 浄土真宗聖典 七祖篇 P六六
- 2 浄土真宗聖典 七祖篇 P六八
- 3 浄土真宗聖典 七祖篇 P七三
- 4 浄土真宗聖典 七祖篇 P九一
- 5 浄土真宗聖典 七祖篇 P九五
- 6 浄土真宗聖典 七祖篇 P九六

- 7 浄土真宗聖典 七祖篇 P一一二
- 8 これらの七カ所は現時点における『老子』『莊子』との対応において明確に判断しうるものとしてであり、種種事功徳積の「蔽麗自然にして」などのように明確な対応関係を未だに判断しえないものや私の考察不足による見落としが存在することは否めないことであり、これらについては今後ご指導を頂きたい。
- 9 印度学仏教学研究 第42巻第1号参照。
- 10 『莊子』徳充符篇
- 11 徳間書店『中国の思想 第12巻 莊子』P一三七頁参照。
- 12 『老子』人間世篇
- 13 徳間書店『中国の思想 第42巻 老子』P九〇参照。
- 14 徳間書店『中国の思想 第6巻 老子・列子』P九〇参照。
- 15 印度学仏教学研究 第42巻 第1号参照。
- 16 『老子』第58章
- 17 徳間書店『中国の思想 第6巻 老子・列子』P一〇七参照。
- 18 『莊子』齊物論篇
- 19 徳間書店『中国の思想 第12巻 莊子』P八二参照。
- 20 『莊子』徳充符篇
- 21 徳間書店『中国の思想 第12巻 莊子』P一三五参照。
- 22 印度学仏教学研究 第42巻 第1号において主格の転換をもってそれを積しようと試みたのであるが十分に納得のいくものではなく、他に曇鸞大師の意図があったのではないかと思われる。

〈キーワード〉『往生論註』、曇鸞、老荘思想

(龍谷大学非常勤講師)